

鏡の奥に、不意に圭吾が現われた。

「あ、珍しいな。きもの。へえ、母さん、きれいやぞ。なかなかか…。」

圭吾は、わざと大仰に露のまわりを歩いてみせて、眺めまわすふりをした。

「もう…この子は…。」

言いつつ露は、いつになく快いたかぶりを覚えていて自分を意識していた。きれいやぞ、と、さわやかに言つてのけた圭吾の言葉が、ふっと露の胸をゆらめかせた。

きものを着た意識の底に、今、応接間に待たせてある娘の存在がなかったといえは嘘になる。

大人げないと自分をたしなめながら、圭吾の選ん

がら、まっすぐに自分を見ている千枝という娘の純粹な眼の色にたじろいでいた。

内山千枝は二十二歳。両親と兄と四人で高松

市内に住んでおり、父親は銀行員であった。高校

を出てすぐ県庁にはいり、以来、圭吾とはずっと同じ課であった。

口数は少なかったが、なかなかの読書家で、本の貸し借りから圭吾と話が合うようになったという。

白い頬を紅潮させながら、露に受け答えする

千枝は、やはり少し固くなっているようであった。

「圭吾は不器用だとばかり思ってたのに、あなたのようないいお友達ができたやなんて…。」

できた娘にはじめて会うことに、妙な気負いを覚えていた露であった。

娘は緊張した面持ちで、ソファの端の方に浅く腰を下ろしていた。

圭吾の後から露がはいつていくと、さっと立ち上がり、深々と一礼した。

白いレースのブラウスに、紅ばら色のスーツが初々しかった。

「母さん、千枝さん…です。」

圭吾はぎこちなく紹介すると、照れたように笑つて、何となく頭をかいた。

「ようこそ。お楽になさって…。」

露は持つてきた紅茶茶碗を千枝の前へおきな

これからはわたしともお友達になってくれる?。」

露は、わざとくだけた調子でいい、千枝にほほえんだ。

「はい。」

と小さな声で返事をした千枝はふっと頬をゆるませると、なぜか大きな息を一つ吐いた。ゆるやかにかけたパーマの前髪がかすかに揺れて、娘らしさがほのぼのと匂った。

さっきまでの奇妙な気負いが、嘘のように消えているのを、露はふしぎな感覚で捉えていた。

「圭吾。あなたの部屋でレコードでも聞いてもらつたら?。」

「そうやな。そうする?。」

圭吾は、千枝を促すと立ち上がった。小さく会釈してドアを出た千枝の後から、部屋を出ていく圭吾が、ふと振り向いた。

露の視線と合った。二つ三つ軽くうなずくと、圭吾は顔の前にちよつとてのひらを立てて見せた。感謝の気持ちを現わすときに、よく見せるしぐさであった。圭吾の輝いた眼が、露に向かつて笑みかけていた。

露の胸の中に、ぼっとぬくもりが広がった。ゆとりを見せている圭吾の恋に、なぜともなく安心感が持てた。圭吾が急に大人に見えた。

(圭吾にまかせておいて、大丈夫……)
これまでとは少し異質の圭吾への思いが、露の

いたように思った。

帯の形が崩れるのもかまわず、ソファに深くと身体をゆだねたまま、露はいつまでも立ち上がりうとしなかった。

露が圭吾の中にいる信次に、会うようになったのは、このころからであった。

その信次をひき出したのは、圭吾のやさしさなのであった。

昭和二十八年、秋。香東川の東岸に接した山肌が雑木紅葉の色に染まる頃、圭吾と千枝の婚礼が行われた。

長山家には、絶えて久しく訪れることのない

胸をあたたかな色に染めていった。それは、一人の男としての圭吾を、はじめてみつけたときめきの色かも知れなかった。

甘酸っぱい香りの含まれているその思いに、露はあえて抗わなかった。

露はソファに深くもたれた。
「母さん、きれいやぞ……」

さつきの圭吾の言葉が耳もとに聞こえた。露はきものの衿を少しゆるめた。寒いはずなのに肌が汗ばんでいた。

「露、きれいや……」
圭吾の声が、いつか信次のそれと変わっていた。いとおしみに満ちた信次の声を、露ははじめて聞

つた華やかな一日であった。

それから二年目の春。三月三日の雛まつりの前夜、圭吾夫婦に女の子が生まれた。

杏子と名づけた赤ん坊のために飾られた大きな雛壇が、長山家の現在を象徴するように、

八畳の座敷を明るくいろどった。
千枝は申し分のない嫁であった。何ごともよく

わきまえていながら、決して露の前へ出さざることのない聡明さを持っていた。

何げないところで、そつと細やかな心使いを感じさせる千枝に、露は人間としての大きさと豊かさを覚えた。

圭吾は、毎日、大体定刻に帰宅した。千枝の手料理の夕食をすませると、杏子をあやしてひとときを過ぎた。日一日とかわいさの増してくる杏子の中に、笑い声の絶えない四人のあけくれが続いた。

露は、幸せであった。

いい息子を持った母親の幸せに、ひたすら酔っていた。

子を持つということは、母親であるということとは、こんなにも満ち足りたものであったのだ。すぐれた圭吾を育て上げた母親としての誇りと喜びが、露の全身を包んでいた。(やっぱり圭吾はわたしの子や。信次さんとの間

の真実は、すなわち、圭吾の真実である。と信じても疑わなかった。ましてや、圭吾が一片の疑念にせよ、抱いていられるかも知れないなどという想念は、露の脳裏には全くはいりこむ隙間がなかったのである。

昭和三十一年、高松市は周辺十五か町村を合併し、その市域を大きく広げた。飯内村も他の町村といっしょに高松市に加えられた。

日進月歩の時代の歩みの中で、豊かさに慣れた人々は、次第に敗戦の苦悩を忘れていった。

長山家にも、なごやかなまどいが続いていた。杏子が、はいはいを始め、つかまり立ちをし、よ

に生まれた長山家の一粒種なんや…) そう言い切ることに、いささかのためたいななかつた。

これは、あの日、信次の腕から圭吾を抱きとつた瞬間から二十七年間、一途に露が執着してきた思いであった。

(圭吾の母親はわたし一人…)

そう心に繰り返しながら日を過ごすうちに、それが否みよのない事実として、露の中にしっかりと定着していた。

それは、露にとつての唯一の真実なのであった。圭吾に対して、その出生の事実をかくす、とか、かくさぬとかの意識は、露にはなかった。自分

ちよち歩きから片言をしゃべり始めた頃には、圭吾も千枝も人の子の親らしくおちつきが見られるようになり、一家には若夫婦を中心とした安心感のある日々がくり返された。

露が丹精している花壇に、黄菊、白菊が花をつけ始めた。

南縁からの日ざしが八畳の座敷いっばいにそそぎ、その日だまりの中で杏子は積木に余念がなかつた。

杏子の相手をしながら、露は、かたわらの千枝を見るときもなく見ていた。

千枝は鏡台に向かっている。もともと色白ではあったが、杏子を生んでから、

千枝の肌は真珠色の艶を帯び、しつとりとうるおいをたたえて匂い立つようにみえた。

千枝は毎朝、化粧を欠かさない。圭吾のいる休日などは、ふだんよりも殊さら身だしなみに心を配っている風であった。

鏡の中の千枝は目鼻立ちが、あざやかに変化していくのを露は、ある感慨を持って眺めていた。

(以上4月14日放送分)